

「今日は最後のお客さまなので、いつもよりゆっくりできますよ」

「あ、そうなんですね」

（ラッキー）

いつものヘアカット施術中にそう言われて、いつもはお願いしないけれど、シャンプーも追加してしまった。髪を切った日だし、それに正直に言えば、波瑠さんのそばにもう少しいたかったからだ。

（そんなこと、本人には絶対に言えないけど……）

波瑠さんは、このサロンの指名客が絶えないスタイリストだ。

このお店に初めて担当してもらったのは、半年前。元々通っていた美容室で、前の担当が異動して新しく紹介されたのが彼だった。

第一印象は、とにかく「かっこいい人」だった。

背が高くて、手が綺麗で、無駄な動きが一切ない。切れ長の目が涼しげで、鼻筋がすっと通っていて、

薄い唇が一文字に結ばれている。彫刻みたいな顔立ちで、施術着の袖を捲り上げた姿は美容師というよりは芸術家みたいだと思った。

「……すごく、丁寧に着をされているんですね」

最後にそう言われ、「この人は、ちゃんと見てくれる」と思って、次から指名するようになった。口数は少なくとも、手が全部語ってくれるから、いつの間にか信頼していた。

「力加減、大丈夫ですか」

低く静かな声が、頭上から降ってくる。

シャンプー台に倒されたまま、お湯の音が耳元で響いている。頭皮にゆっくりと指が入り込んで、泡立てながら丁寧に洗っていく。目を閉じると、温かいお湯と指の圧がとろけるほど気持ちよくて、思わず息をつく。

「力加減、大丈夫ですか」

「はい……気持ちいいです」

（なんか眠くなりそう……。ちゃんと起きていなきゃ）

波瑠さんのシャンプーは毎回おかしいくらい気持ちよくて、うとうとしてしまいそうになる。今日も、目を閉じたまま身を任せていた。ざあざあ流れるシャワーの音と、温かい湯の感触と、慣れた指の動き。

だから、気づくのが遅れた。

シャワーが止まった。タオルで水気を拭かれる。ここまではいつもと同じだった。

「トリートメント、浸透させる間、少しそのままでもいいもらえますか」

「はい」

仰向けのまま、動けない体勢で待っていると、ケープを直すような手つきで波瑠さんの手が動いた。肩のあたりをさすって、鎖骨に触れた。

「頭皮の緊張につながることもあるので、鎖骨周りのこりを確認させてもらいますね」

「え？ は、はい」

そう言うと、波瑠さんはそのまま、ケープの下へするりと手を入れてきた。

「っ……！？」

（え……！？）

胸の上に手が乗った。服越しに、そっと。

「あ、あの……！ 波瑠さん、それは……」

咄嗟に声を上げた。でも焦って、手を払いのけることもできなくて。

「……ここのリンパが詰まると、頭皮への血流が落ちます。トリートメントの浸透にも影響するので」

（え？ でも、だって、そこ。おっばい、なんだけ

ど……)

最初はただ置いているだけみたいな、軽い触れ方だったのが、じわじわと、指に力が込められていく。

むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡

「ん……っ♡ ちょ……待って、波瑠さん……！」
(これ、本当に髪の施術に関係するの……！？)

布越しに胸の重さを確かめるみたいに持ち上げられて、またゆっくり揉み込まれる。どう反応すればいいかわからなかった。

むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅ♡

「んっ……！♡ ふ、あ……や、やめて……ッ♡」

でも身体は反応を始めていて、揉まれるたびにお腹の奥がきゅっ♡ とする。下の方まで、じわりと熱が滲む感覚。脚が勝手に内側に寄った。

「……ブラ、失礼します」

「えッ！？ だ、だめです、それは……！」

声を上げたけれど、器用な指が動いて、気づいた時には留め具が外れていた。Tシャツを着たままで、するりと、ブラが抜き取られてしまった。

（ブラ、取られちゃった……！）

「ブラがあると、リンパの流れが妨げられるので…
…♡」

「えっ……あ、あの……ッ♡」

「乳首がわかりやすくなりましたね♡」

「ふああ♡」

きゅううッ♡ とTシャツの上から両方の先端をつままれて、鼻にかかった声が漏れる。

（や……両方同時に……♡）

「声、可愛いですね♡」

「ふ、うう♡ ちが……や、やめてください……ッ

ああん♡♡」

「感度、いいんですね♡」

Tシャツの生地ごと乳首を扱かれる。すりすり♡と衣擦れの音が静かなサロンに響いて、羞恥心が一気に押し寄せてくる。

「あっ……ン、ふあ、あん……♡」

乳首を触られる度にお腹の奥がきゅんと締まって、おまんこから蜜がとろりと溢れてくる。止められなくて、もじもじと太ももを擦り合わせてやり過ごすしかなかった。

くにくに♡ くにくにくに♡ くにくにくに♡

「んっ♡ んんっ♡ ふ、ううう♡」

くにくに♡ カリカリカリ♡ きゅっ♡ きゅっ♡

「やっ、やめ……っ♡ ン、はあん……♡♡」

つままれたり、弾かれたりする刺激で乳首を弄ばれるたびに、全身が快楽に支配されていく。耐えようとすればするほど意識がそこに集中してしまって、我慢できずに腰が動いた。

(私、波瑠さんに乳首擦られてる……♡ ずっとかっこいいと思って通ってた、あの波瑠さんに……♡)

波瑠さんが手を止めた頃には、動いていないのに、息が上がっていた。

「……舐めると、より血行が促進されます♡ 少し、いいですか♡」

「だ、だめです……！♡ それは、さすがに……！♡」

けれど、あっという間にTシャツを首元まで捲り上げられて乳首に吸いつかれる。

れろり♡ れろれろれろ♡ れろれろれろ♡

「ンッ♡ やぁ、ん……♡ ま、まって……あん♡♡」

れろれろ♡ れろれろ♡

ちゅぱっ♡

乳輪ごとしゃぶられて、口の中でこりこり♡ と
乳首を舌で転がされる。

れろれろ♡ れろれろ♡ ちゅぱちゅぱ♡

（おっぱい食べられてる♡ 口の中、熱い……♡ 乳
首、溶けちゃう……♡♡）

波瑠さんが一度、乳首から唇を離した。濡れた先端にふうっと息を吹きかけられて、背中がぞわりと粟立つ。

「んっ……」

「左を吸ったので、今度は右を吸いますね♡」

「そ、そんな……ッんん！♡♡」

一度離れた唇が、再び近寄ってくる。

ちゅぱっ♡ ちゅぱちゅぱ♡ れろれろ♡

「んっ♡ ふ、う……あっ♡ あぁ♡♡」

唾液たっぷりの舌でべちょべちょと舐め回されて、不規則なタイミングで甘噛みされる。乳首を吸われるとなぜか身体が甘く痺れて、舌で転がされるのも歯を立てられるのもどちらも気持ちよくて区別がつかなくなってくる。

「あん♡ ああっ♡」

ちゅうっ♡ と強めに吸われるとお腹の奥が疼いて、こりこり♡ と歯で挟まれるように愛撫されると背筋に電流が走ったように痺れる。

「あ、や……っ♡ あっ♡ ああっ♡」

れろれろ♡ れろれろれろ♡

ちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱ♡